

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：34408

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H03979

研究課題名(和文) 市民と専門職で創生するケアリングコミュニティの実現

研究課題名(英文) Realizing caring communities created by citizens and professionals.

研究代表者

田村 恵子 (TAMURA, Keiko)

大阪歯科大学・歯学部・教授

研究者番号：30730197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,300,000円

研究成果の概要(和文)：COVID-19感染症の影響により、予定していた地域社会で病いとともに生きる人々や家族、市民と専門職で創るケアリングコミュニティにおける対話の効果を検証することが困難となった。そこで、アフターコロナ社会を見据え、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型のケアリングコミュニティの実現を目指した。オンライン参加者を対象にインタビュー調査を実施した結果、参加者は対面と同様の影響を受ける一方で、オンライン特有の感覚を得ていた。ハイブリッド型のケアリングコミュニティでの対話の効果検証の実施に至ることは出来なかったが、対面とオンラインを組み合わせたケアリングコミュニティでの対話の実践を開始した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかとなったオンライン対話による参加者への影響は、これまで対面でしか実施されてこなかった対話の可能性を広げる新たな視座となる。そして、今回の結果を更に発展させることは、アフターコロナ社会における対面とオンラインを組み合わせたケアリングコミュニティ構築への寄与となる。

研究成果の概要(英文)：Due to the impact of COVID-19 infection, it has been difficult to test the effectiveness of the planned dialog in caring communities formed by people living with a disease in the community, their families, citizens and professionals. With a view to a post-corona society, the aim was therefore to create a hybrid care community that combines online and face-to-face interaction. The interviews conducted with online participants revealed that while participants were affected in a similar way to face-to-face, they also developed a sense of online specificity. Although it was not possible to conduct a test of the effectiveness of dialog in a hybrid care community, the practice of dialog was initiated in a combined face-to-face and online care community.

研究分野：がん看護学

キーワード：慢性疾患 対話プログラム 生きる知恵 スピリチュアルケア コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

1) 少子高齢社会で求められるケアリングコミュニティ

日本では、2025年問題に代表されるように、未曾有の高齢多死社会を迎え、更に2040年問題では少子化による人口減少、現役世代(担い手)不足が提起されている。このような人口構造の変化に伴って医療制度の立て直しが迫られ、既存の急性期医療機関と地域との連携体制だけでなく、新たに地域住民同士が互いに支え合い健康増進や暮らしを豊かにするための共生社会の実現が課題とされている。

高齢化に伴う慢性疾患(がん、心疾患、脳血管疾患、糖尿病など)の罹患者数は増加の一途を辿り、特にがんは2人に1人が罹患する時代になっている(平成29年度がん統計)。がん体験者は、治療技術の進歩によって長期生存が可能となったが、一方で、生命が脅かされる疾患であることから自己の死に直面し、人生の再構築を迫られるなか、治療を終えても尚、再発による不安を抱えている(竹内ら, Jpn J Psychosom Med, 2018)。他方、がん体験者は、自己の死に直面する体験から得られた、生き抜く強さを持っている(砂賀ら, 日がん看会誌, 2014)。このがん体験を生き抜く強さを知恵として育むためには、人と人との相互作用を生み出す対話が必要であり、病いとともに生きる人々は家族、市民、専門職との対話を通じたケアリングによって、自己の病いの体験が活かされ、社会の一員として活躍することが可能になる。このような、病いとともに生きる人々と市民や専門職が対話を通して互いに支え合う場がケアリングコミュニティであり、少子高齢・人口減少時代の到来に備えて豊かな共生社会を実現する要となる。

2) ケアリングコミュニティづくりの課題

欧米では1990年代から、急性期のヘルスケアシステムと地域での長期的ケア、教育、社会生活などのヒューマンサービスシステムを統合し、ケアの効率化、利用者の満足度の向上、医療費用削減のため「統合ケア」体制が構築されてきた歴史があり、WHOによって積極的に推奨されてきている(Leutz WN, The Milbank quarterly, 1999; WHO, Framework on integrated people centered health services, 2017)。また、がん・非がん疾患に関わらず、予防的な介入も含めた早期からの緩和ケアは、身体、心理社会的な苦痛の軽減、医療費削減のためにも有用であり(Tripett DP, JOP, 2017)、急性期のヘルスケアのみでなく公衆衛生的な観点からの体制構築の重要性が述べられている(Stjernswärd J, JSPM, 2007; WHO, Integrating palliative care and symptom relief into primary health care, 2018)。

一方、わが国は、病いを抱えた人々への公衆衛生的な活動として、訪問看護ステーションの働きを発展させた「暮らしの保健室」があり、疾患が重症化する前に、患者の不安や悩みに対応できる場として各地に展開されている(秋山, コミュニティケア, 2019)。しかし、その活動の中心は、専門家による相談支援であり、その場に集う人々全体の相互作用を意識した場づくりに焦点が当てられていない。他方、市民や疾患を持つ当事者と専門家が語り合う医療カフェの活動は(孫, 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌 2015)、参加者の変容的学習が起きやすいことが示唆されている。しかし、対話によってどのような変容が及ぼされるのか検証した報告は見当たらない。

3) これまでの探索的研究から得た仮説

2015年より京都市で、主にがん体験者や家族、市民と専門職の対話を支援し、がんとともに生き抜く力を育み支え合うケアリングコミュニティの構築を目指して「ともいき京都」の活動を開始した。2016年基盤研究(C)では、「ともいき京都」スタッフの質の担保を目的に教育プログラムを開発(杉田, 京府医大看護紀要, 2021)し、がん患者を対象にスピリチュアルペインアセスメントツールを使用した介入研究によってその効果が示され(Ichihara, Palliat and Support, 2019)、ともいき京都の参加者を対象にした「病いとともに生きる知恵を育む要素」を明らかにするための質的研究を実施した(前滝, 投稿中)。参加者の変容、即ち病いとともに生きる意味や価値(スピリチュアリティ)を見出し、主体的に生きようとするプロセスは、専門家による臨床的なアプローチのみでなく、参加者の背景である地域社会で取り組む公衆衛生的アプローチが重要とされている(田代, 緩和ケア, 2009)。しかし、これまでの「ともいき京都」の活動は、公衆衛生的な観点を意図した試みに到達しておらず、今後はコミュニティでの健康増進、QOLや尊厳の維持、主体的に生き抜くための公衆衛生的アプローチである対話を通じたケアリングの充実と、医療・介護による臨床的アプローチとの有機的な連携である「統合ケア」を視野に入れた、地域共生社会の実現が期待される。

2. 研究の目的

地域社会で病いとともに生きる人々や家族、市民と専門職で創るケアリングコミュニティにおける対話の効果を検証することであり、具体的には下記を明らかにする。

- 1) 先行研究で明確化した「病いとともに生きる知恵を育む要素」を取り入れた対話の実践知のバターンをつくり、対話プログラムを確定する。
- 2) がんを含む慢性疾患を持つ様々な世代、特に思春期・若年成人が望む対話プログラムを考案す

る。

3) 先行研究で開発した「病いとともに生きる意味を探求するツール」を元にスピリチュアルケアガイドを作成し、対話プログラムに活用する。

3. 研究の方法

1) 対話の実践知のパターンをつくり、対話プログラムを確定する

井庭のスーパーバイズを受け、先行研究で明らかにした「病いとともに生きる知恵を育む要素」を基に「ともいき京都」の対話の実践知とアイデアを合わせ、パターン・ランゲージを作成する。パターン・ランゲージは、研究者と「ともいき京都」スタッフ 20 名(10 人グループ×2)でブレインストーミングを行い、KJ 法を用いて作成し、一つ一つのパターンを状況・問題・解決・結果として明文化し、研究者と「ともいき京都」スタッフ、参加者が月 2 回のプログラムの中で共有する。

2) 思春期・若年成人が望む対話プログラムの考案

「ともいき京都」では、既に思春期・若年成人の 3 ヶ月毎のミーティングがある。そこで思春期・若年成人特有の悩みを踏まえ、先行研究の「病いとともに生きる知恵を育む要素」を基に、KJ 法を用いて病いの体験者(10 人グループ×4)が対話によるケアリングの在り方を検討し、パターン・ランゲージを作成、対話の場づくりを促進する。

3) スピリチュアルケアガイドの作成

スピリチュアルペインアセスメントツールを開発し(Tamura et al,2014; Morita et al,2009,2014)、がん患者を対象にした介入研究によって心の穏やかさの維持と不安の軽減を示した(Ichihara,2019)。この先行研究から得た質的データを後方視野的に質的に分析し、地域社会での汎用のため人と人との相互作用によって見出されるケア内容を抽出、整理し、地域版ケアガイドを作成する。

4. 研究成果

COVID-19 感染症の影響により初年度である 2020 年度より研究活動が進まず、予定していた地域社会で病いとともに生きる人々や家族、市民と専門職で創るケアリングコミュニティにおける対話の効果を検証することが困難となった。そこで、アフターコロナ社会を見据えたケアリングコミュニティの実現を目指す必要性を感じ、2021 年度よりオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型のケアリングコミュニティの実現を目指し、研究内容の修正を行った。

そして、2022 年度には任意団体「ともいき京都」のオンライン参加者 9 名(男性 1 名、女性 8 名)を対象に、オンライン活動に参加することによって参加者がどのような影響を受けているのか、オンラインを活用した場は対面の場とどのような共通点や相違点があるのかを明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施した。調査の結果、オンライン参加者は「他者の役に立てるように自分の経験を伝えたいと思う」や「頑張っているのは自分だけではないと思える」など対面と同様の思いを抱く一方で、「コミュニティの広がりを感じる」や「対面時とは異なる参加者との近さを感じる」などオンライン特有の感覚も得ていることが明らかとなった。こうした思いを育むために参加者は「対等な立場で楽しく参加できる雰囲気がある」など対面時と共通した場の提供を求めている一方で、「体調や予定に合わせた参加方法が選択できる」などオンライン特有の場の提供を求めていることも明らかとなった。

2020 年度から「ともいき京都」ではオンライン活動を継続しており、参加者から継続を望む声が多く聞かれていた。そこで、2022 年度の研究結果を踏まえ、2023 年度は対面とオンラインを組み合わせたケアリングコミュニティでの対話の実践を開始した。研究期間内にハイブリッド型のケアリングコミュニティでの対話の効果検証の実施に至ることは出来なかった。しかし、参加者にアンケート調査を行いながら、活動内容の見直しを繰り返し行い、アフターコロナ社会を見据えたケアリングコミュニティの実現を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 田村恵子 | 4. 巻 32 |
| 2. 論文標題 緩和ケアにおける対話を拓く | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 緩和ケア | 6. 最初と最後の頁 467-470 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 市原香織, 近藤めぐみ | 4. 巻 32 |
| 2. 論文標題 がんと共に生きる知恵を育む場での対話 「ともいき京都」の試み | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 緩和ケア | 6. 最初と最後の頁 510-512 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 近藤めぐみ, 田村恵子 | 4. 巻 31(Suppl) |
| 2. 論文標題 患者サロンをウェブで - 地域の患者サロン(ともいき京都) | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 緩和ケア | 6. 最初と最後の頁 114-116 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 市原香織 | 4. 巻 31(Suppl) |
| 2. 論文標題 看護実践に活かせるスピリチュアルケアセミナー スピリチュアルケアをオンラインで探求する！ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 緩和ケア | 6. 最初と最後の頁 136-140 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Ichihara Kaori, Nishiyama Chika, Kiyohara Kosuke, Morita Tatsuya, Tamura Keiko | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 Nursing Care for Spiritual Pain in Terminal Cancer Patients: A Non-Randomized Controlled Trial | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Pain and Symptom Management | 6. 最初と最後の頁 126 ~ 137 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpainsymman.2023.10.016 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 市原香織, 近藤めぐみ, 梅田恵, 鈴木直美, 田村恵子 |
| 2. 発表標題 地域社会でがんとともに生き抜く知恵を育む対話の場づくり |
| 3. 学会等名 第27回日本緩和医療学会学術大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前滝栄子, 近藤めぐみ, 杉田智子, 坂井みさき, 市原香織, 田村恵子 |
| 2. 発表標題 がん体験者のための対話型支援活動の参加者が語る生きる知恵 |
| 3. 学会等名 第27回日本緩和医療学会学術大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Kondo, M; Sugita, T; Maetaki, E; Sakai, M; Ichihara, K; Tamura K. |
| 2. 発表標題 The wisdom to survive with cancer in the narrative from participants in the interactive support activity for cancer survivors. |
| 3. 学会等名 17th World Congress Of The European Association For Palliative Care (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 升井 万梨子、田村 恵子、白井 由紀、井沢 知子 |
| 2. 発表標題 ライフストーリーから読み解く AYA 世代がん患者の自律性の有り様 |
| 3. 学会等名 日本がん看護学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 近藤めぐみ, 南裕美, 前滝栄子, 市原香織, 田村恵子 |
| 2. 発表標題 オンラインを活用した対話型支援により育まれるがん体験者の生きる知恵に関する調査 |
| 3. 学会等名 第38回 日本がん看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 田村恵子 |
| 2. 発表標題 共に生き、支え合うネットワークづくり |
| 3. 学会等名 第10回日本CNS看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 田村恵子 |
| 2. 発表標題 緩和医療におけるスピリチュアルケアの実践 |
| 3. 学会等名 スピリチュアルケア学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 田村恵子 |
| 2. 発表標題 看護がつなぐ共生社会～ともいき京都の活動を通して～ |
| 3. 学会等名 第11回大阪府看護学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 瀧口俊子, 大村哲夫, 和田信編著, 田村恵子分担著者 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 創元社 | 5. 総ページ数 400 |
| 3. 書名 共に生きるスピリチュアルケア 医療・看護から宗教まで | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 西山 知佳 (NISHIYAMA Chika) (40584842) | 京都大学・医学研究科・准教授 (14301) | |
| 研究分担者 | 星野 明子 (HOSHINO Akiiko) (70282209) | 大阪成蹊大学・その他部局等・教授 (34437) | |
| 研究分担者 | 平井 啓 (HIRAI Kei) (70294014) | 大阪大学・人間科学研究科・准教授 (14401) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 森田 達也 (MORITA Tatsuya) (70513000) | 聖隷クリストファー大学・看護学研究科・臨床教授 (33804) | |
| 研究分担者 | 清原 康介 (KIYOHARA Kosuke) (80581834) | 大妻女子大学・家政学部・准教授 (32604) | |
| 研究分担者 | 本間 なほ (ほんまなほ) (HOMMA Naho) (90303990) | 大阪大学・COデザインセンター・教授 (14401) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |